

野生の手仕事と知恵 展

2021年 9月10日(金) - 11月7日(日) 無印良品 銀座 6F ATELIER MUJI GINZA Gallery1

1 漁に使う道具

漁をする際に用いるこちらの道具。餌をカゴの先に入れておき、中に入ると出られなくなるという仕掛け。日本の東北地方でも、このような「ドウ」と呼ばれている籠状の漁具が今でも使われています。

2 気絶させるための矢

矢は獲物を獲るための道具ですが、必ずしも命を絶つことだけを目的とするのではなく、命を奪わずに気絶させて捕まえるための矢もあります。それらの矢の先端は尖っておらず、丸みを帯びて団子のように盛り上がっています。気絶させて捕獲するのは主に鳥です。ベツとして飼ったり、装飾品用の羽を手に入れるために生きたまま捕獲します。



3 調節可能な背負子(しょいこ)

魚や芋や食料を運ぶための背負子。運ぶものの質量によって幅が調節できるよう考えて作られています。背負うと見えなくなる部分の幾何学模様のパターンや、左右非対称な細工は作り手のこだわりです。



4 快適な寝具

ハンモックは、アマゾンで先住民が生活する中で考案した道具です。雨の多い熱帯では、地面は湿っており、暑さで寝苦しいことも多いです。その点、ハンモックは背中を風が通るので、通気性が良く快適で、地面を這う毒のある昆虫や動物からも身を守る合理的な寝方です。

5 抱え帯

ブリヤシンの繊維で編み込んだ赤ちゃんを抱っこするときに使う帯です。帯の中央には、赤ちゃんが遊べるようにと飾りをつけています。



6 主食の毒抜き方法

アマゾン川流域の人々が主食としているのがマンジョーカです。マンジョーカは、タピオカの原料であるキャッサバ科の芋です。デンプン質に富んでいて、加工しやすく、保存にも適している万能食物ですが、自然の状態では青酸の毒を含んでいるため、この「チビチ」という伸縮性のある籠筒を使って毒を絞り出さなければ食べられません。

7 教育も兼ねた玩具

木彫りの動物や土人形は、現在の日本では、供物や縁起ものとして親しまれていますが、一部のアマゾンの先住民達は子供の教育道具としても用います。「川にはワニという、こうした形をした獰猛な動物が息しているから、気をつけること」「木に巻きついた動物は蛇といい、噛まれたら大惨事になる場合があるから、気にしながら森を歩くこと」ですとか、「料理はこうやって作るのだよ」と家事の様子を象って生活の一端を伝える人形もあります。

8 どんな地面にも

アマゾンで暮らす人々をよく土器や壺を使うが、必ずしも地面が平らとは限りません。この台は、どこでも壺や物を置けるように作られました。



9 掃除道具

アマゾンの先住民も、やはり身の周りの整理整頓をします。レア(南米に生息する大型の陸鳥)の羽根や、オオアリクイやハナグマ動物の尻尾で作ったハタキからは、手に入れた素材を工夫して使う心持ちを感じます。

10 文化の異なる人々からもたらされた素材

アマゾン地域以外の人々が持ち込んだ缶を加工して道具に。軽くて丈夫だと感じたのでしょうか? 手に入るものを工夫して道具にする。「共生の知恵」とは、頑なに伝統を保って生きるのではなく、与えられた資源を最大限に活かし、自然環境の一部として生きること、そして順応し続けることなのかもしれません。

11 種の継続

アバライ族とワイアナ族は、神話を通して互いに通婚関係を結び、民族の垣根を超えて融合された文化を伝承しています。この祭りの小屋の天井にすえつける儀礼用円盤は、そのきっかけとなった怪物(双頭のアナコンダ)退治の神話をあらわしています。

12 むしり取らない羽

アマゾン先住民の装飾品の中でも鳥の羽根飾りは特に目を引きます。鳥は、天と地上を結ぶ特別な生き物と考えられており、彼らは装飾品を作るためにむやみに命を奪うのではなく、生きて捕獲し、自然に脱げ落ちた羽を使います。